

---

# パーフェクトスポーツ用品店

青い絵 八代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パーフェクトスポーツ用品店

### 【Nコード】

N0910F

### 【作者名】

青い絵 八代

### 【あらすじ】

少年二人は、ともに協力する部活仲間である。最近心が通い合っていない二人は、何気なく暮らしていた。でも、転校生が来た。その転校生の柏があまりにも勇敢なので、少年の一人の歌舞伎は少年の一人の槌田といっしょに備考をすることにした。その先にあったのがスポーツ用品店だった。

## 「プロローグ」

スポーツといえばどんなものがあるだろう。

野球、テニス、サッカー、バスケット、ソフトボール、多様化するスポーツに光を当てるそんな商売をする秘密のお店があった。

パーフェクトスポーツ用品店……。

「おい、ヘイパス」

「あ分かった」

パスが回っていく、これはサッカーである。

友人の槌田がやっているスポーツ。彼は運動神経はいいんだ。それに比べて僕はあんまりでね。そんな生活が嫌になっている中学生。

「おい、カッチー、ボーっとしてないで練習練習」

僕は歌舞伎 甲、特に特徴はない。あえてあげると、寝癖がひどいことかな。なかなか直なくてさ。

「聞いたか、この学校に転校生」

「ん？」

無口な僕は聞くことが楽しい。でもそんな生活が続くわけがなかった。

「その転校生は数々のサッカーの大会で優勝しまくってさ、そんなもって頑張ったで賞みたいなのもいっぱい持つてるんだって。俺もいつかあんな有名な名人になりてー」

槌田ならなれるよ。

こんな会話が続けるのもいまだけだ。ここから数々の試練にぶつかっていくのだから。

今考えなければいけない課題は三つある。

その一、学校生活の勉強と部活の両立。

その二、転校生の素質を少しでも分けてもらおう。

その三、大会。

果たして僕は大会に出場できるのでしょうか。  
帰り道、僕はこう考えた。もっと楽しくスポーツができればいいのに、と。

そんなふと思ったことが実現してしまうとは。

一体どこにあるんでしょう。不思議な不思議なお店。

スポーツの楽しさ

「スポーツなんてさ、できればやれるんだよ。聞してる？ 歌舞伎」

「あつうんうん、それでそれで」

「だからさ、何でいつも宿題してんの？」

「しつかにないだろ、塾もあるんだから」

珍しく僕は怒鳴った。時間がある今のうちに宿題をやっておきたいんだ。大会が近い、そんなこと分かってる。でも……言葉にできない思いが邪魔をするんだ。勉強は学生の本分、でしょ？

「スポーツが嫌いになっちゃうよ！」

「分かってる、もう終わったよ宿題」

「ではでは、せっかくだし、一対一でもしますか」

「おう」

二人の心にはサッカーによつての友情が舞っていた。つまり嫌いなことでもどんなことでも好きな友達とやれるゲームなら楽しいってことなんだ。

「なになに、その新しいドリブル」

槌田はそう語りかけてきた。

「実は昨日考えたんだ、教えてあげようか」

「いいよ」

「いいの『いいよ』だった。」

このドリブルの仕方の基本は前後に足でボールをはさみクイックさせるといふ、目立ちやすいスタイルでした。特徴のあるキックも

できるけど、それは転ぶよ。

槌田のうまさはオリンピック並みだ、でも一つ気づいた。彼にはサッカーに対する重要な部分がないと。

それをうまく伝えたかった、だから僕は本気で偉そうながらサッカーを教えてやることにした。

「本気で行くから」

「カッチーもセンスあるね、俺も本気出すよ」

こんな二人の時間がずいぶんと流れた。先生も感心していた。二人がこんな世界のこんな場所で頑張っている、それを見ていた僕たちのライバルは確かにこういった。

「負け犬の遠吠えなんて悲しいぜ、雑魚」

どこかでそんな思いがはじけると、なぜか時が経つのが早かった。「さあ、もう遅いし帰ろう」

「俺も帰ろう」

僕の夢はサッカーをもっと楽しみたい。明日もあさっても。

転校生の伝説

「転校生の柏 ひつぎ 日次君です」

「どうせ僕なんかが出る幕なんてありませんよ」  
暗いなあ。でもどんな奴か分からないや。

「その席どうぞ、柏君」

えー僕の隣？

「よろしく」礼儀正しい。回りに挨拶をしている。

僕も軽く会釈した。

そういう日々が過ぎ、転校生に伝説ができた。それはスポーツ界の革命的な出来事だった。

「ガンッ」

「うっ」

転校生は練習中、普段は目立たない生徒に足を蹴られた。もちろんスパイクで、僕は見ていられなかったので、手当てに行くと。

「マナージャーじゃない人は引つ込んでください。これは僕の戦いです」

そう言つて練習を再開すると、見事にシュートを決めたのだ。血まみれの足で。

もちろんその足じゃ大会には出られない。でも彼のしたことは革命的だった。

その後、僕と槌田は『柏君とお友達になろう大作戦』を実行することを決めた。

尾行していると、ある店にたどり着いた。

「パーフェクトスポーツ用品店？」

はじめてみるお店だ。

「不思議な商品あります？」

中に入つてみることにした。

音楽はずいぶん昔のロックだ。イメージはそんな感じ。

スポーツの店だけあつて品揃えはよく、あらゆるスポーツ、カヌー、卓球いろいろだ。

「お店によっこそつ……」

勢いのある来店挨拶は、衝撃とともに止んだ。

「この店はどんな人でもっスポーツのつプロになれる店ですよっ」  
続行することに決めたらしい。

「柏君だよ、女装するなんてとっても似合ってる」

「そうそう、うわーこんなスポーツ用品店に一回きてみたかったんだあゝ、ハハ」

「つけてきたのなら、帰つてもらつところですが、店も用があるよ  
うなので特別に中身をお見せします。では、どうぞごゆっくり」

柏君の新しい姿が見れた気がした。小さなことだが……。

もう終わりかい？ 終わりならエンディングを。

これからのスポーツ界の革命のようなものを見て欲しい。

パーフェクトなだけあつて格段にプレーがきれいになるらしい。

そんな店をみなさんも見つけてください。

ようこそ、パーフェクトスポーツ用品店！

## 「プロローグ」(後書き)

スリルを書けたと思います。スポーツの楽しさが分かってくれれば何よりうれしいです。



## 「悩み解決」

「この店にあるものはどんなものなんですか？」

「いい質問だね、実はその名の通り運動能力をアップさせる商品がざつと並んで知るんだ」

そのこと以外に気になったのはありとあらゆるスポーツ用品にこの店独自のブランドがついて回っていることだ。

「ドーピングですか？」 槌田がいい質問をした。

「ここだけの話ですが、これらの商品はつばを利用して運動神経をあげているんです」

へえ〜コナン君のキック力増強シューズみたいだなあ。

「ちよつとはかせてよ」

「いいですよ」

槌田は好奇心旺盛だな。 まっ僕が冷静なだけか。

「なんか動きづらい」

「ねえ、そろそろ帰ろうよ。楽しみは後でとっておこうよ。今日は

槌田の苦手な社会のプリントがあるじゃん」

「そうでしたそうでした。 またくるぜ柏！」

槌田も素直な性格だな。

「君たちと会えてよかったよ」

「こちらこそ」二人同時に言った。

「ハハハハ、面白いそのネタ、ツハハ」

「確かに自分でも笑えるハハ」

今日も帰り道で楽しく笑うことができた。でもそんな日々は長くは続かないのだろうから、もっとまじめに生きていけばよかったと後で後悔していた。

家に着いた。なんとなく面白いテレビがいればいいなと思って

いた。

「カッチー、おやすみ」

「じゃあな、ヤッチー」

弟の矢吹<sup>やぶき</sup>だ。

どうしようもない弟だけど挨拶がしつかりできるいい奴だ。

このまま和やかな家族でいれればと思う。

「プルルル」携帯が鳴る。

「どうした槌田」

「まさにミラクル大逆転ツーランホームランだよ」

「お前、サッカーが趣味じゃねえーのかよ」

「そんなこと関係ねえ」

「はいはい、見ますよ」

「プチーン」

「おもしれー」

「だろ」

「野球のスリルも学びたいよな、あのスポーツ用品店で」

「不思議な店ならできるかもね」

「そうさってサッカーだろ」

「意外とサッカーにこだわるねカッチーも」

「サッカーはシュートを決めろ！、シーユーゼン」

翌日

明日からは楽しい連休、でも勉強をしなければならぬという重圧感が僕を襲っていた。

「そんな怖い顔してたら運気が逃げちゃうぜ」

「槌田ー」

「まっすぐ前を向いて、部活に取り組もうぜ」

「その言い方が嫌だから宿題」

「本当にめんどくさがりやだね、君も」

「悪いか」

「悪いよ」

……

その後僕は一人で部活をサボリスポーツ用品店に行った。ここなら僕の心が分かってくれる人がいるかも。

「いらっしやい」

出てきたのは駄菓子屋にいるようなおばちゃんだった。

「スポーツばあちゃんじゃよ、スポばあと呼んでおくれ」

チョコバーみたいでおもしろかった。

「実は……」

「わかつとる、その体格からしてあまり運動に向いてないのじゃろう」

「はい」

「そんな体格じゃ体に負担がかかるのも無理ないのう」

「僕はどうすればいいんですか。本当は部活がしたいだけなのに」

僕は泣いてしまった、涙ぐんでしまった。

「アンチベルトを授ける」

「アンチベルト？」

「それが君のスポーツを可能にする装置じゃ」

バックトウーザフューチャー風だった。

涙を拭いて僕は練習場に向かった。

はじまるんだ、スポーツバトルが。

## 「悩み解決」(後書き)

楽しければいいですね。

はつきり言って友情の大切さが分かります。

はじめまして、青い絵八代の小説を評価してやってください。楽しみです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0910f/>

---

パーフェクトスポーツ用品店

2010年10月9日23時15分発行